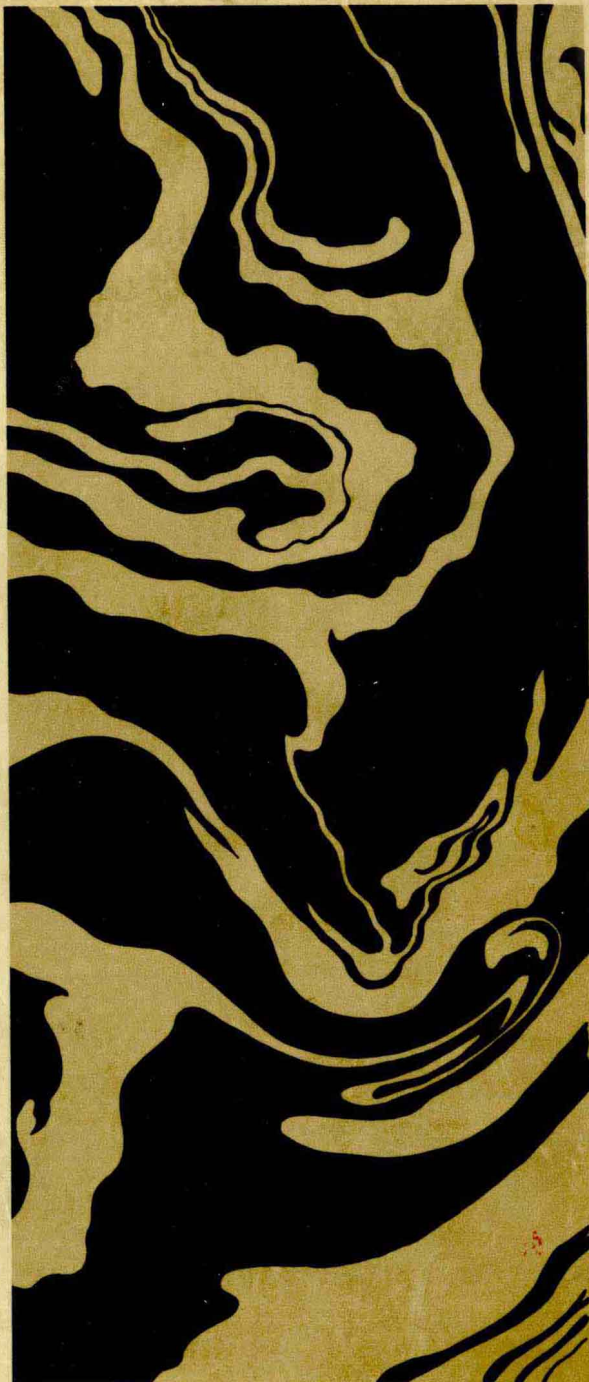


大鏡

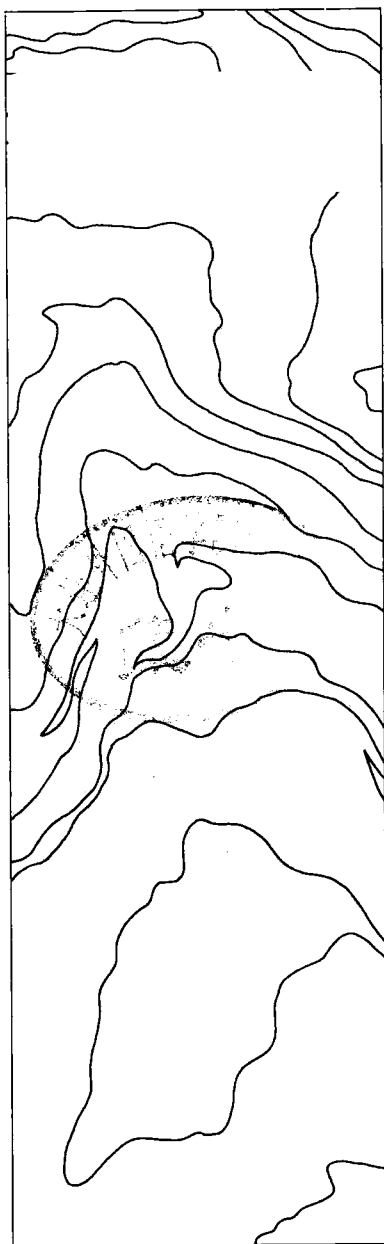
井路子

古典を読む

11



岩波書店



大鏡

永井路子

岩波書店

永井路子

1925 年東京に生まれる

作家

『炎環』(光風社出版; 文藝春秋), 『北条政子』
(講談社; 角川書店), 『水輪』(中央公論社)な
ど

大 鏡

1984 年 2 月 20 日 第 1 刷発行 ©

1985 年 10 月 20 日 第 3 刷発行

定価 1500 円

著 者 なが い みち こ
永 井 路 子

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・三陽社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

プロローグの魅力 三

私の『大鏡』再発見 3

語り部たちのプロフィール 6

庶民たちの瞳 9

十四人の天皇メモ 一五

『史記』の世界をめざす? 15

二条のきさきと業平伝説 19

高子の実像 23

花山退位事件 27

盲目の天皇 34

あらたに見ゆる古鏡 37

母后と大臣 39

藤原氏栄光への道 四九

娘たちのもたらした栄光 49

基経の眼差	52
時平と道真	59
豪胆の長者の子孫たち	69
素腹の后とその一族	74
賢母と愚息	78
東宮即位せず	84
最後の勝利者・九条流の登場	九二
女御のやきもち	91
百鬼夜行を見た男	101
蔵人頭をめざして	106
心やさしき行成	117
兼通の執念	123
中関白家の落日	……… 二六
うちふしのみこ	129
きさきの密通	136

酒豪の関白 142

非運の貴公子 150

気骨の人 158

七日関白 167

王者道長……………一七三

息子の出家 173

闇夜の胆試し 178

母后詮子の登場 183

大御堂供養 193

昔物語と裏書 200

賀宴の舞台裏 206

魔魅の効用 212

あとがきにかえて……………二九

藤原氏系図 帝王・源氏系図

大鏡

プロローグの魅力

私の『大鏡』再発見

面目もないことだが、『大鏡』に対しては二度「初対面」の経験を持っている——というのも妙な話だが、最初はまず学生時代、国文専攻のコースに入学した第一年めの講読に『大鏡』があった。

どんなすぐれた文学作品でも、学校で教えられると、とたんに色あせたものになるのは世の常ではあるが、とりわけ『大鏡』はひどかった。不勉強な学生で『源氏物語』や『枕草子』ほどに予備知識を持たなかったせいもあって、ちっともおもしろくなかった。

それでいて何年めかのリポートに『大鏡』を選んだのは、『源氏』や『枕』よりも読みやすいというそれだけの理由からである。多分『栄花物語』あたりと比較して、いい加減

にまとめたはずだが、内容はまったくおぼえていない。まだ将来歴史ものを書く人間になるうなどと思ってもいなかったころのことだ。

それから七、八年後、懸賞募集の広告を見つけたことから、突然歴史小説を書いてみようと思ったのだから、何とも大それた話だが、それが、まぐれともいうべき幸運で二席に入賞した。以後よたよたもの書きへの道を歩みはじめるのだが、じつはこの第一回作品の舞台が『大鏡』の世界だったのである。

小説を書こうと思いたって、『大鏡』を読みかえしたが、情ないほど、学生時代の記憶は失せていた。

が、そのゆえに――。

胸のふるえるような新鮮な感動を味わった。これこそ私の『大鏡』に対する二度めの「初対面」だった。過度の感情流出を抑えたさわやかなタッチ、短い文章の中で人間をみごとに浮かびあがらせているテクニクの冴え、対象に溺れこまない、ちょっとばかり皮肉な視線。まさに大人の文学の妙味がここにはあった。人生経験が不足で、学生時代にはわからなかったおもしろさに、やっと目を開かれたということかもしれない。以来『大鏡』

は私にとって離れがたい存在となった。

このときの感動を、この読みとりの中でお伝えできればと思う。しかし残念なことに、ここには一つの障害がある。なぜなら、順序に従って巻頭から読み進んでゆくとすると、この作品の中で、最も魅力の乏しいところから始めることになってしまふからだ。まず書きだしにはこうある。

さいところ雲林院の菩提講にまうでて侍りしかば、例人よりはこよなうとしおひ、うたてげなるおきな二人、おうなといきあひて、おなじところにゐぬめり。

山城国愛宕郡紫野（現京都市）の雲林院^{うりんいん}で法華經の講説の行われた万寿二（一〇二五年、ひどく老いぼれた翁二人と老婆一人が、その場に來あわせていた。学生時代、この冒頭の「うたて」について詳しい説明を聞いたような記憶がある。つまり「いい感じ」の逆、通俗的にいうなら「あまりぞっとしない」とでもいおうか。が、国文学的な説明は詳細にすぎ、こちらの方がすっきり「うたてき」心持になってしまった。

うたてき老人が最初に登場するとは、まったく幻滅させられるではないか。しかも二人は百九十歳、百八十歳というのだから、現実感のないことおびたらしい。その上話が進行すると、この年齢に矛盾が出てくる。年上の老人はみずから清和天皇が譲位した丙申の年（八七六）に生れたといっているのだから、この時点では百五十歳でなければならぬ。作者はすでに初歩的ミスを犯している。

少し読んでたちまち見抜けるのは、このとほうもない老人を出したのは、彼らに昔物語をさせようとしている作者の趣向である。何と陳腐、かつ幼稚な発想であることか。

と、まあ、これがかつての私のいつわらざる感想であった。この思いがすべて消えたわけではないが、古典的な物語のプロローグはまずこんなものだと観念して読むと、そこにはまたなかなかおもしろい問題が含まれていることに気がつく。しかしそれに触れる前に、一応、登場人物を紹介しておこう。

語り部たちのプロフィール

百九十歳と称する老人、大宅世次おおやけのよつぎは、宇多天皇の母の班子女王はんしに仕えていたことがある。

父は大学寮の学生がくしやうに使われていたおかげで多少の読み書きができ、自分の生年うぶぞうを産衣に書きつけておいてくれた、と自慢する。その名がしめすごとく、公おおやけの世々のことを次々に語ろうという人物である。この場には登場しないが彼には年上の妻がいることになっている。やや年下の方は夏山重木なつやまのしげき。太政大臣藤原忠平ただひらがまだ蔵人少将くらうどのしょうしょうだったころ、小舎人童こねりわらわおいぬまるとして仕えていた。連れの老婆は彼の妻で、先妻は死亡、その後につれそつた女だと、重木は説明している。そこに二人の話の聞き役として、三十歳くらいの侍ふらの男が加わる。侍といっても、いわゆる「武士」ではなく、身分のある人に仕える従者である。さらに姿は表わさないが、この光景を書きとめているはずの「筆者」がいる。これも現実の作者ではなく、架空の人物だが、三条天皇の中宮で、三条の死後、皇太后となった妍子けんしに仕える人間という設定になっている。

重木は少年時代に大宅世次を見知っていた。久しぶりで雲林院でその姿を見かけ、なつかしさのあまり声をかける。大宅世次も大喜びである。

「やあ、これはうれしい。前から昔を知る人とめぐりあって、いろいろな物語をしたいと思っていた。これで思いのこすこともなく冥土へもゆけるといふものだ。思うことを言わ

ないのは全く腹ふくることだ」

しかも寺には今日の講説を聞こうとして多くの人が集まっている。その人々にも聞いて貰おう、と世次が意気どめば、重木も言う。

「そりゃけっこう。さあ思い出してお話なされ。私もときどきは覚えてのことなど申しあげてお相手しましょう」

中でも世次が語りたいのは、現在栄華の中心にある入道殿下——すでに出家している前摂政藤原道長のことである。そのためには、そこにいたるまでの歴史を語らねばならないし、しぜん歴代の帝王、后、大臣、公卿のことに触れなくてはならなくなる。

「それにいまどきの若い衆は、それまでの摂政、関白、大臣なども、みな入道殿下のようだと思っているようだが、それは大まちがいだ」

と世次は大見栄を切る。物蔭にかくれていた筆者（架空の）も、はじめは内心大したことはあるまい、と思っていたのだが、話を聞いてみると、これがなかなかのものだったので、しだいに興味をそそられていった。

庶民たちの瞳

三人の登場人物が語りあいながら物語を展開してゆくという発想は、『大鏡』にはじまったことではない。古くは空海の『三教指帰さんこうしきき』がある。儒者、道学者、仏教者が登場し、各々の信じるところを語り、その中で仏教の優位が決定づけられている。『大鏡』の作者（真実の。もっとも誰かということには、学者の間にも諸説がある）は、多分、この『三教指帰』を読んでいたに違いない。ただし空海のは一種の文化論、思想論だから、現在残る作品で見ると、文学の分野でこの手法を使ったのは『大鏡』がはじめてである。

この一種のドラマ的手法を思いついたとき、作者は大いに鼻うごめかせたことだろう。物語の進行におもしろさが出てくるし、時に複眼的な視点を加えることができる。この手法は日本人の好みにあつたらしく、のちに『太平記』の中の「北野通夜物語」にも、同じような形が見られる。いやそれだけではない。おびただしい数の能、狂言は、いずれもシテとワキ、アドを登場させているではないか。

あまりにこの手法のくりかえしを見せつけられているので『大鏡』を読んでも、新鮮さ

が感じられないのだが、考えてみると、『太平記』も、能も狂言も、みな『大鏡』以後の所産なのである。つまり『大鏡』はこうした手法を用いた文学作品の元祖ともいべき位置にあるのだ。そのことを認識しなおして、これを思いついたときの作者の胸のときめきを追体験し、少しは敬意を表する必要があるのではないか。

さらにもう一つ、私が心をひかれているのは、彼ら語り手たちが、ともかく庶民(当時にはこういう便利な言葉はなかったが)という形で登場していることだ。もちろん真の作者は、かなり教養のある中流貴族の一人であることはまちがいないが、彼は大きな枠組として、庶民の語る同時代史という文学的設定をしているのだ。

この構想に私はある感慨を持たざるを得ない。これは先行する歴史書、歴史物語にはなかったことだ。世次は『古事記』を誦^よみ習^なわされたという稗^{ひえだ}田阿礼^{あれ}とは全く性格を異にする。誰かに命ぜられて歴史を暗記したのではなくて、自分の思いだすままに見聞を語ったのである。

しかも年齢の問題を除けば、彼らの人物設定はかなりリアルである。とりわけおもしろいのは夏山重木だ。彼は世次に生年月日を問われて、はっきりしたことはわからない、と

答える。

「これはまことのをやにも（そひ）侍らず、他人のもとにやしなはれて十二三まで侍りしかば、はかばかしくも申さず」

さらに養われた事情を、養父はこう語ったという。

「我は子うむわきもしらざりしに、主の御つかひにいちへまかりしに、又わたくしにも錢十貫をもちて侍りけるに、にくげもなきちごをいだきたる女の、「これ人にはなたんとおもふ。子を十人までうみて、これは四十たりの子にて、いとど五月にさへむまれてむつかしきなり」といひはべりければ、このもちたる錢にかへてきにしなり。「姓はなにとかいふ」ととひ侍れば、「夏山」とはましける」